

【理論編】縄文土器の文様構造と造形デザイン
 —モノから見る作り手の社会と心—
 石井 匠（國學院大學博物館・多摩美術大学芸術人類学研究所）

はじめに

日々、地中から掘り出される遺物・遺構は、忘却された過去に生きた他者たちの存在を私たちに知らしめる、もの言うモノである。ウイトゲンシュタインを徴すれば、縄文時代の「論理空間」は私たちにとって「語りえぬもの」となり沈黙するほかはなくなる事象（土器文様の翻訳等）も確かにあるだろう（小林 2009）。

しかし、私は、野矢茂樹が言うように「他の論理空間を他の論理空間のままに理解すること」「私の論理空間を変化させて相手の論理空間を手に入れること」（野矢 2008）を試みつけたい。その試みを支える道具が「モノ理論」であり、「物とモノのちがいを」認識することであり、縄文土器文様の構造分析の方法である（これらの道具は万能ではないため、常にメンテナンスとブラッシュアップが必要である）。

縄文土器を「物」として捉えることは、縄文論理空間を現代人の論理空間によって強引に翻訳することであり、多くの歪みを生む。一方、土器を「モノ」として捉えることは、現代社会に生きる私たちにも残されている芸術的知覚（中島 2010）や、現生の狩猟採集民がもつ神話的思考の論理空間を頼りに、縄文論理空間に近づこうとする試みである。不確かではあるものの、前者の翻訳よりは解釈の歪みは少なくなるだろう（本資料集では理論的枠組みを提示するに止める）。

1. モノ理論のモデル

私たちが「モノ」という言葉を聞いて思いつくのは、「物」「者」だろう。しかし、ここでの「モノ」は、それらだけを意味しない。モノ学の提唱者である鎌田東二は、モノは「物質性

としての『物』から人間性としての『者』を経て、霊性としての『靈』にまで至る多次元的なグラデーションを持っている」という（鎌田 2007）。

つまり、モノは①物〈自然物・人工物・場所〉、②者〈人・人間性（人格）〉、③靈（魂）という3つの要素を、境目のない「多次元的なグラデーション」として同時に備えているということになる。この鎌田のアイデアをアレンジし、モデル化すると図1のように表せる（石井 2012）。

図の中心にあるモノには、人間をふくむ生命・物質・自然物・人工物・場所、超自然的存在などの森羅万象が当てはまる。この場合のモノに、見えるもの／見えないものという区別はな

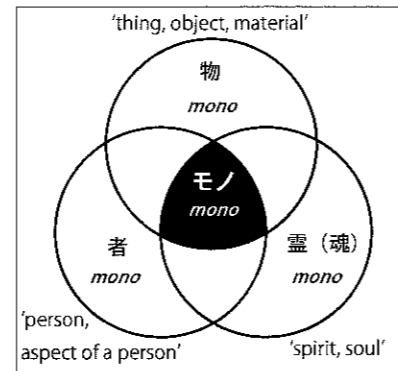


図1 モノの3要素

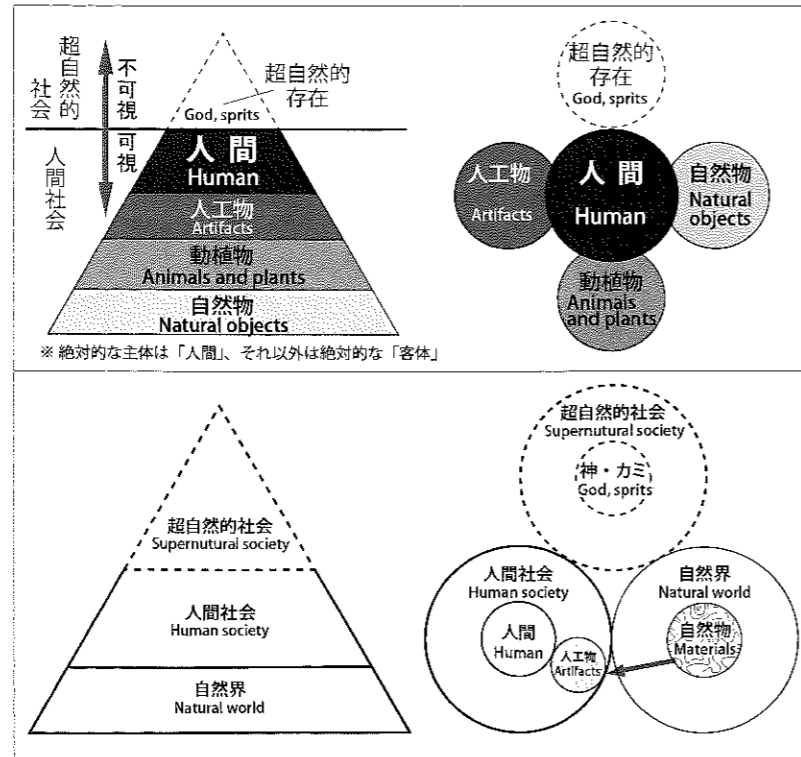


図2 人間中心主義下の資本主義経済社会における「物」の関係性と位相

い。私たちの世界に存在すると考えられる、あらゆるものがモノである。

2. 物とモノのちがいを

上記のモノの概念は、人間中心主義下の資本主義経済社会で生活を営み、神話的思考よりも科学的思考に馴染みのある現代人には、なかなか理解しにくい。そこで、物とモノに対する認識を比較し、そのちがいを見てみよう。

現代人の世界認識をモデル図化すると、図2のように表せる。常に人間が上位に君臨し、中心にいる世界観である。不可視の超自然的な存在（社会）は、信仰対象として意識されるものの、資本主義経済社会では切り離されている。

人々は衣食住に関わる人工物（道具）に取り囲まれ、動植物（愛玩・観賞用動植物を除く）を食料として、自然物を人工物の材料（素材）として、すべからく自然界から採掘・採取・確保される資源＝「物」と認識し、人間以外の物は、人間から断絶され、遠ざけられたピラミッド階層の下位に位置づけられている。

いっぽう、先史時代以降の狩猟採集魚民の世界観は、現代人の世界観とは対極的である（図3）。彼／彼女らが認識する世界では、人間は世界の上位や中心に存在しない。森羅万象がモノとして認識され、「超自然的存在＝自然物＝動植物＝人工物＝人間」というように、すべてが分かちがたく結びつくメビウスの帯のような表裏一体の関係性にある（図3上段；石井 2011c）。

たとえば、人間と自然物、人間と人工物、超自然的存在と動植物、動植物と人工物と超自然的存在、動物 A と動物 B、動物 C と植物 A、人工物 A と人工物 B、人工物 C と超自然的存在 A ……などの無数の組み合わせの関係は、対立するものではなく対称の関係にあり、容易に入れ替わり、融合しうる（縄文時代前期の土器に具象的な顔表現が現れたり、中期以降に土器と土偶が融合したり、後期には両者のハイブリッドが出現したりする所以；石井 2010b）。三次元の立体モデルでいえば、連結する5つのメビウスの帯で構成される球体状のかたちをイメージしてもらえばよい（図3上段）。

また同様に、人間社会・自然界（社会）・超自然的社會も、現代社会のように分離されて捉えられておらず、各社会は重なり合う球体のようなものであり、境界すらも曖昧である（図3下段）。自然界・超自然的社會・人間社会のそれぞれを構成する成員（動植自然物・超自然的存在・人間）は、元は一つであると考えられており、森羅万象を構成するすべて事物が「初元的同一性論理にもとづく超自然的互惠性」（煎本 2010）によって結びつく密接な関係性にある。そのため、あらゆるモノに対する人間の一方的な支配（従属化）・管理・使役（使用）という事態は起こりえない。

3. 土器というモノ

モノ理論とモノの位相モデルを縄文論理空間に接近するための設計図と仮定した時、縄文論理空間における「土器（人工物）というモノ」の立ち位置は、自然界・超自然的社會・人間社会と各社会の構成員が重なる中心になる（図3下段）。この場合、土器はすべてのモノ性を凝集した存在であり、すべての社会に通底している媒介者でもある。

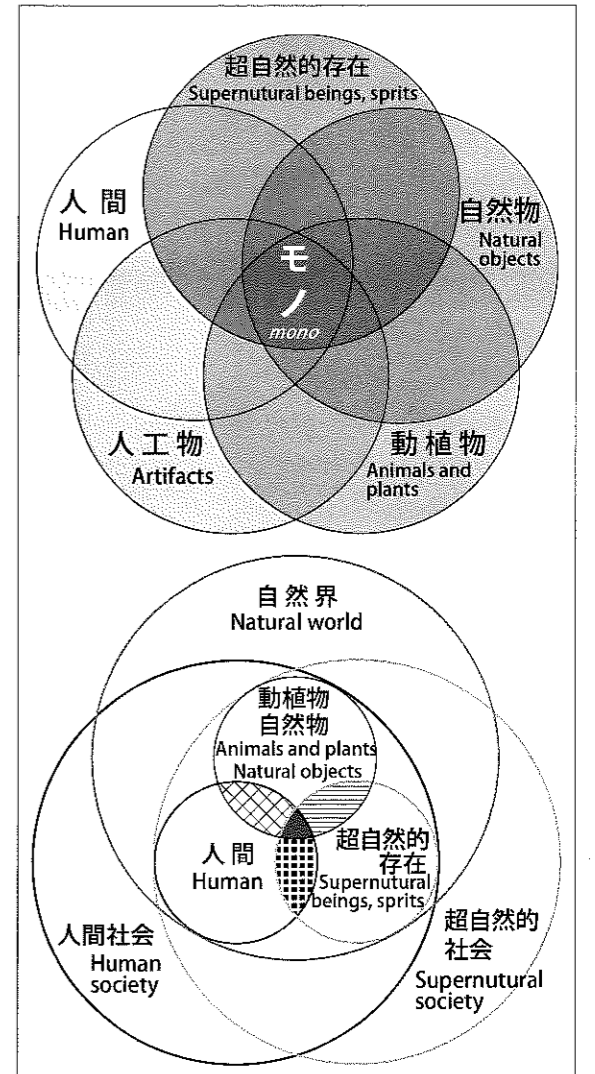


図3 神話的思考の「モノ」の関係性と位相モデル

このことは、縄文土器への顔（正面）の付与や文様のアシメトリーの徹底化（別紙）に関係しており、岡本太郎が「縄文土器論」で縄文時代の遺物（土偶や仮面等の第二の道具のみならず、生活の煮炊きで常用する第一の道具である土器も）がすべからく「四次元を指向している」という所以でもある（岡本 1952）。

ところで、縄文時代の人工物が生みだされるデザイン設計の過程は、図 4（石井 2011b を改変）のように表せる。詳しい説明は別稿にゆずるが、私が図 4 で強調したのは、神話的思考のモノ（人工物）の発明・制作の契機は、人間の発案ではなく、自然界の構成員であるモノや超自然的社会からの要請にあるということである。

現代社会における超自然的存在を除く人間以外の存在は、人間が支配・管理するものであり、人間生活の利便性を高める資源としてしか扱われない。したがって、絶対的主体として世界に君臨する人間が人工物を「製造」する行為は、人間が一方向的に絶対的客体の資源に働きかけ、設計・加工・製造し、使用するに止まる（図 5）。

ところが、芸術家や狩猟採集漁民のモノづくりは、別の社会の構成員であるモノからの要請に応えることから始まり、超自然的時空間内で行われる場合がある（図 6）。人間は他のモノとの接触・儀礼・対話を重ね、制作時には五感を通じ、他者としてのモノと同一化する（図 6 上中段）。岡本太郎（2004）が「素材ではなく、作者者のうちに入り、作者自身になってしまう」、プエブロインディアン人のデキストラが「粘土と私は、同じ素材。ひとつ、です。あなたは粘土を触りながら自分を触っている」（徳井 1992）と語るように、人間と非人間は合一化し、主客は転倒もする（人間が非人間に使役される）。完成時には分離し、それぞれが以前とは似て非なるモノ

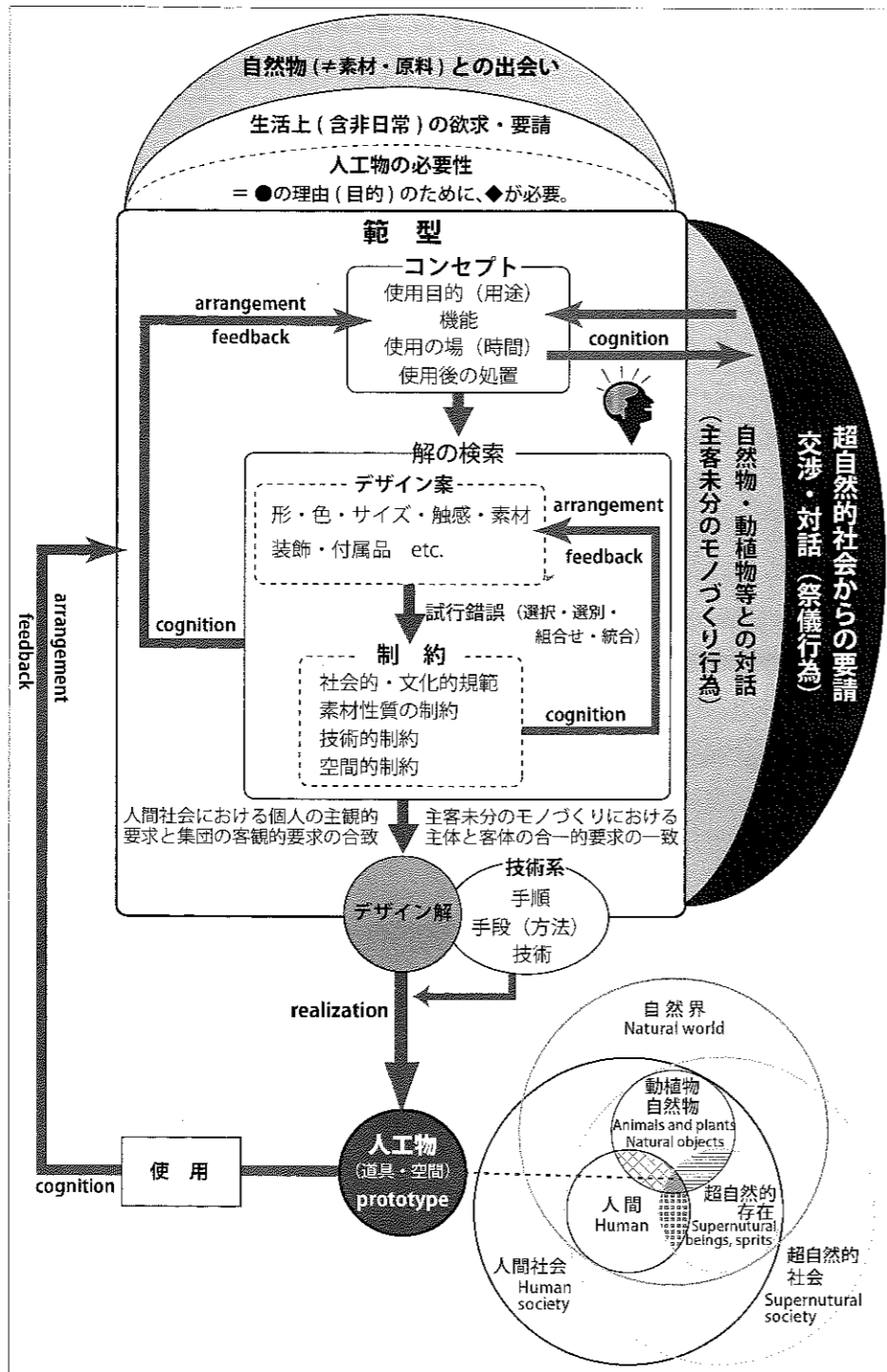


図 4 モノづくりの心機モデル (Ver. 2)

ノに転身し、土器は粘土であった過去の時点よりも、人間とのつながりを深めたモノとなる。

※以下当日配布資料

4. 土器文様からつくり手の心を読みとる
5. 連動化する縄文土器と土偶の造形デザイン

引用参考文献

石井 匠 2009『縄文土器の文様構造—縄文人の神話的思考の解明に向けて—』（未完成考古学叢書 7）、アム・プロモーション

石井 匠 2010a『謎解き太陽の塔』幻冬舎新書 188、幻冬舎

石井 匠 2010b「縄文土器のイメージ『消化器』表現の変遷を中心に」『日本基層文化論叢—相山林継先生古稀記念論集』雄山閣

石井 匠 2010c「物づくりにおける『モノ』とは何か—縄文土器と現代フィギュアの比較から—」モノ学・感覚価値研究、第 4 号、京都大学こころの未来研究センター / モノ学・感覚価値研究会

石井 匠 2011a「5 縄文土器のデザイン」、文部科学省私立大学学術高度化推進事業「オープン・リサーチセンター整備事業」東北地方における環境・生業・技術に関する歴史動態的総合研究平成 22 年度研究成果報告書、東北芸術工科大学東北文化研究センター

石井 匠 2011b「大形石棒の造形デザイン」、縄文時代の大型石棒—東日本地域の資料集成と基礎研究—：國學院大學研究開発推進機構学術資料館「考古学資料館収蔵資料の再整理・修復および基礎研究・公開」研究報告、國學院大學研究開発推進機構学術資料館

石井 匠 2011c「モノと心の先史人類学—『初原的同一性』と『エージェンシー』—」、國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要、第 3 号、國學院大學伝統文化リサーチセンター

石井 匠 2012a「石神—モノと心の古代学—」、祭祀儀礼と景観の考古学：國學院大學伝統文化リサーチセンター「祭祀遺跡に見るモノと心」プロジェクト最終成果報告書、國學院大學伝統文化リサーチセンター

石井 匠 2012b「アイドルのモノ学」、モノ学・感覚価値研究、第 6 号、京都大学こころの未来研究センター / モノ学・感覚価値研究会

石井 匠 2012c「2 章 縄文土器の造形デザイン—秘められた『四次元』の探求へ—」『縄文土器を読む：Reading the Jomon Pots』アム・プロモーション

煎本 孝 2010「人類の進化と北方適応」、文化人類学 74(4)、日本文化人類学会

岡本太郎 1952「四次元との対話—縄文土器論」、みづゑ、通巻 556 号

岡本太郎 2004『美の呪力』新潮文庫

鎌田東二 2007「発刊の辞—モノ学への挑戦—」、モノ学・感覚価値研究、第 1 号、京都造形芸術大学 / モノ学・感覚価値研究会

小林達雄 2009「縄文時代中期の世界観—土偶の履歴書—」『火焰土器の国 新潟』（株）新潟日報事業社

徳井いつこ 1992『スピリットの器』地湧社

中島 智 2010「亡霊としての芸術〈眼のプリコラージュ〉のための覚書」web complex、<http://genbaken.web.fc2.com/essay/nakashima/nakashima2.html>

野矢茂樹 2008「1『語りえぬもの』をめぐって」『岩波講座 哲学 13 宗教／超越の哲学』岩波書店

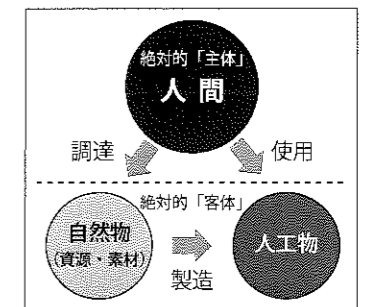


図 5 「製造」における主体と客体の関係性

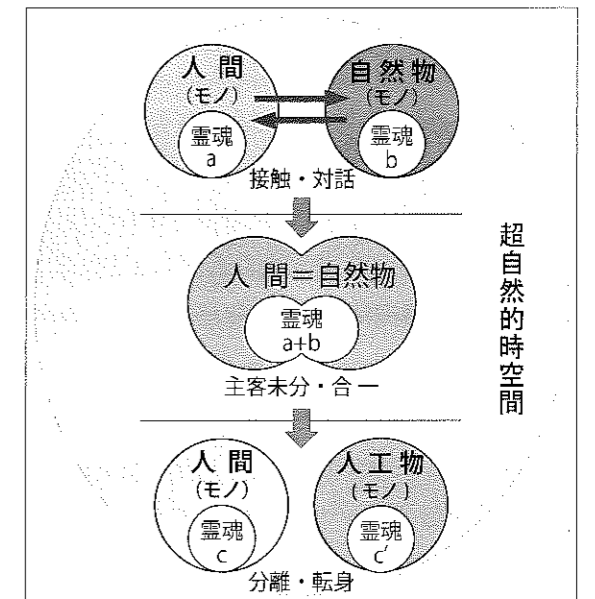


図 6 「モノづくり」における主体と客体の関係性